

Title	単行本発行と出版社：その戦略と特徴
Author(s)	井原, あや; 内海, 紀子; 小澤, 純 他
Citation	太宰治スタディーズ. 2014, 5, p. 8-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97199
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University



朝日新聞社／井原あや

著者から許諾が得られていないため非公開

「津軽」(小山書店)



小山書店／井原あや

著者から許諾が得られていないため非公開

「パンドラの匣」(河北新報社)



河北新報社／内海紀子

河北新報社は、東北地方の代表的日刊紙「河北新報」を擁する新聞社である。所在地は宮城県仙台市五橋一―二―二十八。一八九七(明治三〇)年一月一七日、一力健治郎(一八六三―一九二九)が請われて「東北日報」を引き継ぎ、「東北振興と不偏不党」を社是に掲げて、「河北新報」を創刊した。「河北」は白河以北の意であり、南奥統一を果たした伊達政宗の偉業を讀えて頼山陽が一八三〇(天保元)年に詠んだ「河北すべて独眼竜に帰す」という漢詩の一句から採られた。戊辰戦争の敗北後、東北諸藩が薩長人によって「白河以北一山百文」と蔑視されたことへの反発と、薩長政権の専断政治を正し、後進性を乗り越えて近代化へ踏み出そうとする東北復権の決意とが、「河北」の題号に込められていたという(『宮城県百科事典』一九八二・四、河北新報社編集宮城県百科事典編集本部)。創業以來、東北文化興隆の一翼を担い、『河北年鑑』や『東北文学』を刊行している。二〇一一年三月一日の東日本大震災の際には、報道写真集『巨大津波が襲った 3・11大震災』、被災地のルポルタージュ『河北新報のいちばん長い日』をまとめた。

河北新報社と太宰治の交流は深い。一九四三(昭和一八)年一月に日本文学報国会が大東亜会議で採択された〈大東亜共同宣言五原則〉の文学作品化を企画した時、太宰はこれに応じて「独立親和」をモチーフとした『惜別』執筆に取りかかることになった。この際に河北新報社に協力を仰いでいる。「仙台河北新報社の好意で、仙台市の歴史を知るために同社秘蔵の貴重な資料は片端から読破できた事は、私の仕事に、どんなに役立つかわからない」(太宰「惜別」あとがき)。取材の詳細は以下のようなものだった。

仙台での取材に力を貸してくださった河北新報社の村上辰雄、宮崎泰二郎、川井昌平諸氏の回想記によると、太宰は同社出版部の片隅で貸してもらった「河北新報」の明治三十七、八年の綴込を机の上に順序立てて積み上げてメモをとった。寒そうに背中を丸めて三日間午前午後ぶつ通しでその仕事を続け、早仕舞した日には村上氏に案

内していただいて東北帝大医学部の加藤豊治郎博士に、医学部の全身の仙台医専について話を伺い、また仙台の町を歩いて昔を偲んだ。「中略」

「河北新報」の綴込から太宰がとったメモ（二百字詰原稿用紙十五枚）は「周さん」が留学していた当時の主要な報道を拾う一方、仙台の世相、風俗、市井雑事など、小説の背景となり、雰囲気を出す記事を蒐めたのであって、まず目につくのが、日露戦争の戦況、とくに仙台第二師団の出征、活躍、戦勝祝賀の催し、ロシア俘虜のことなど。（津島美知子「惜別」と仙台行、「太宰治全集」第八巻）

また、河北新報社文化局長（津島「惜別」と仙台行）に準拠すれば河北新報社出版局長」という要職に就き、仕事を離れても太宰と交情が深かった村上辰雄は、昭和二〇年、終戦後日本で初となる新聞連載小説の執筆を太宰に依頼した。経緯については村上「終戦直後の金木町にて」（『太宰治全集』第九巻）に詳細に綴られている。村上は「終戦後、敗戦日本で最初に連載される新聞小説」を企図して太宰に執筆依頼の電報を打つ。一九四五年九月二五日のことだった。そして当夜のうちに青森行の夜行列車に乗り、郷里に疎開中であつた太宰を訪問するのである。

「小説書いてくれるね」「うん、書きたいと思つているのがあるんだ。〇書店からも催促されているし迷つている。何しろ終戦だろう。僕は改めて希望というものを感じている。パンドラの匣から、最後に見つけ出した生きがいというか、もう長虫だの歯のある蛾だの毒蛇は見たくもないんだ」「パンドラの匣、それがい、それにしよう」

こうして『パンドラの匣』が生まれた。同年一〇月二日から連載開始、翌一九四六年一月七日発行の第一七六五号まで計六四回にわたつて連載され、完結後に単行本『パンドラの匣』が河北新報社より発行された。収録作品は「パンドラの匣」、「作者の言葉」、村上辰雄「跋」、作者紹介であり、奥付の記載は昭和二十一年六月五日発行、河北新報社（仙台市東三番丁一七〇、三原良吉）となつている。



「女の決闘」(河出書房)

河出書房／内海紀子

美濃出身の三浦源蔵(一八三一～一九二〇)が、明治初期に岐阜県岐阜町で版元兼書店の成美堂を始めた。内田正雄編『與地誌略』等を刊行し、一八八六(明治十九)年に東京に支店を出している。この、河出静一郎によって日本橋材木町に開かれた成美堂支店が、河出書房および河出書房新社の前身にあたる。創立当初は「数学、理学、地理学等の出版を中心に特色を出していた」(塩澤実信『出版社大全』二〇〇三・一一、論創社)。

一九三三(昭和八)年、二代目河出孝雄のもとで社名が河出書房と変更され、文芸書を中心とした出版形態へとシフトが始まった。河盛好蔵や若沢光治良、鈴木信太郎らを訳者に迎えた『バルザック全集』全一六卷(一九三四～三五)、辰野隆他訳『モーパッサン傑作短編集』(一九三五～三六)、米川正夫訳『ドストエフスキー全集』の刊行によって文芸出版社としての基礎を固める。この時期は海外文学の翻訳が際立っているが、日本文学でも林芙美子『文学的断章』(一九三六)、井伏鱒一『ジョン万次郎漂流記』(記録文学叢書第八卷、一九三七)等が意欲的に刊行され、一九三七(昭和十二)年の島木健作『生活の探求』(書きおろし長篇小説叢書第二卷)はベストセラーとなった。またこの書き下ろし長編小説叢書シリーズの一環として、深田久弥『知と愛』、阿部知二『幸福』、丹羽文雄『豹の女』、林房雄『太陽と薔薇』等、昭和前期を代表する作家の文芸作品が世に送り出されている。太宰治の著書としては『女の決闘』が一九四〇(昭和十五)年に出版されている。奥付の記載によると発行年月日は昭和十五年六月十五日、発行者および所在地は河出書房(東京市日本橋区通三ノ一、代表者河出孝雄)となっている。収録作品は「女の決闘」、「駈込み訴へ」、「古典風」、「誰も知らぬ」、「春の盗賊」、「走れメロス」、「善威を思ふ」である。一九四五(昭和二〇)年の東京大空襲の際、河出書房の社屋が焼失し、東京都千代田区神田小川町三ノ八に移転した。戦後初期の主要な出版ジャンルは社会・文芸・科学・哲学である(大久保久雄、福島鑄郎監修『戦後初期の出版社と文化人一覧』二〇〇五・三、金

沢文圃閣)。戦争末期から戦後にかけて出版界は低迷していたが、『現代日本小説大系』全六十五巻によって苦境を乗り切った。石川達三『生きてゐる兵隊』（初出は『中央公論』一九三八・三）は、敗戦もない一九四五年二月に河出書房から刊行されたのである。続いて三島由紀夫『仮面の告白』（一九四九）、野間宏『真空地帯』（一九五二）等の刊行があり、戦後派文学の牙城としての面目を新たに示した。

一九五七（昭和三十二）年に一度目の倒産（この後に河出書房新社の設立と相成る）、一九六七（昭和四十二）年に二度目の倒産を経験したが、文化・文芸出版に基軸を置く基本精神を保持しつつ現在に至る。田中康夫の『なんとなく、クリスタル』（一九八二）や俵万智の歌集『サラダ記念日』（一九八二）といった従来の小説や短歌の既成観念を打ち破る話題書を生み出し、特に後者は二百万部を優に越える空前のベストセラーを記録した。塩澤実信は「百十数年の歴史を持つ出版社には、読書子の信頼という地下水脈が脈々と流れ続けている」と評している（前掲書）。

また河出書房および河出書房新社は、坂本一亀、杉森久英、川西政明、来嶋靖生、竹西寛子、竹之内静雄といった敏腕の文芸雑誌編集者を擁した。新人発掘の目利きとしてつとに名高い坂本一亀は、三島『仮面の告白』、野間『真空地帯』、椎名麟三『永遠なる序章』を世に送り出し、雑誌『文藝』の編集長として高橋和巳、辻邦生、丸谷才一らを育てた。（塩澤実信『戦後出版史―昭和の雑誌・作家・編集者』二〇一〇・一二、論創社）。高橋和巳は一九六二（昭和三十七）年、「悲の器」で『文藝』第一回長編部門に当選した。文藝賞は新人の登竜門ともいわれ、一九八〇（昭和五十五）年の田中康夫「なんとなく、クリスタル」（第十七回文藝賞受賞）、一九八五（昭和六十）年の山田詠美「ベッドタイム・アイズ」（第二十二回受賞）、二〇〇二（平成十三）年の綿矢りさ「インストール」（第三十八回受賞）、二〇〇四（平成十六）年の白石玄「野ブタ。をプロデュース」と山崎ナオコーラ「人のセックスを笑うな」（第四十一回受賞）等、数多くの才能を輩出し続けている。



「東京八景」
（実業之日本社）



「櫻桃」
（実業之日本社）

実業之日本社／小澤 純

『実業之日本社百年史』（一九九七・一二、同社）によれば、創業日は一八九七年六月一日、大日本実業学会から「実業之日本」が創刊された日である。学会は、創業者・増田義一と東京専門学校同窓の光岡威一郎が「帝国実業の発達振興を図る」ために創立、義務教育修了者対象の農科・商科講義録を発行した。同誌では成功者を多く紹介したが、一九〇二年一月に刊行した鋼鉄王カーネギーの『実業の帝国』は短期間に数十版を重ねた。一九〇六年一月に「婦人世界」を創刊、女子教育の普及に応え、村井弦斎を迎えて料理法や家庭の医学に特色を示した。創刊三年目から委託販売制を採り、最高で三二万部を売り上げた。一九〇八年には「婦人世界」の妹誌「少女の友」を創刊、良妻賢母の予備軍を想定して「婦人世界」の常連（村井や竹久夢二の挿絵）が腕を振るい、「日本少年」や「幼年の友」と共に好調な売れ行きを示した。広義の国民教育に携わる方向性は、戦中、青年学校用教科書に取り組み姿勢へと繋がる。文芸部門では、一九二二年に高浜虚子『小説朝鮮』、翌年には夏目漱石『社会と自分』の他、年少向けの『愛子叢書』（島崎藤村『眼鏡』や田山花袋『ちいさな鳩』）、次いで「世界名著物語」と「近代文豪評伝」シリーズを刊行した。

昭和初期の円本全集ラッシュとは距離を置いたが、一九二七年七月に刊行された九条武子『無憂華』は、不遇な結婚生活を送った名門出の麗人による創作集で、半年で百版を超えるベストセラーとなった。「婦人世界」は美容と自立を主眼とする新興誌に圧され一九三一年に同社の手を離れるが、「少女の友」は、主筆・内山基の都会的でエレガントな誌面構成で勢いを付け、一九三五年に挿絵画家・中原淳一を迎え吉屋信子や川端康成の少女小説を載せ、圧倒的な支持を集めた。一九三七年には内山に主筆を兼任させ未婚女性をターゲットにした「新女苑」を創刊、吉屋の他に芹沢光次治良・中里恒子・井伏鱒二・円地文子・矢田津世子らを執筆陣に迎え、再び文芸部門を充実させる礎となる。『東京八景』は、一九四一年五月に小磯良平の装幀で刊行されたが、小磯は「新女苑」の表紙を一九四三年

までほぼ毎号描いている。そして六月号に「令嬢アユ」が掲載され、新刊の広告といった役割を担った。同年には井伏「シグレ島叙景」、山岸外史『希望の表情』、亀井勝一郎『雲術の運命』、保田與重郎『美の擁護』、高見順『花さまさま』等を出版する一方、「ドイツ民族作家全集」や「日本国家科学体系」シリーズも手掛け始める。翌年をピークに文芸書は点数を減らし、雑誌も戦時色に染まる。「雪の夜の話し」が「少女の友」に載るのは一九四四年九月だが、中原は一九四〇年七月以降、同誌に描くことを禁じられていた。

戦後、同社は再版も含め多くの文芸書を刊行、一九四六年七月に「文學季刊」を創刊し、第三号（一九四七・四）では、太宰・坂口安吾・織田作之助・平野謙が一堂に会した「現代小説を語る座談会」を掲載する。興味深いのは、『斜陽』ブームが起ころ以前の一九四七年二月に旧作「道化の華」・「乞食学生」・「風の便り」を収めた『道化の華』を刊行することだ。太宰は田中英光宛書簡（一九四七・四・二付）で、原稿の持ち込みに関して「新潮社より、実業之日本社の倉崎氏のはうが、スムーズに行く」と薦めている。同社は太宰生前に全集の企画を立てていたが、結局、八雲書店が引き受ける。一九四八年七月二十五日、『人間失格』（筑摩書房）と同日に『桜桃』を刊行、八月には小磯から脇田和に変えて「東京八景」改裝版を出した。翌年一月刊行の『新日本代表作選集 小説篇Ⅰ』には、「ヴィヨンの妻」が安吾「白痴」、織田「世相」と共に再録される。週刊誌ブームの中、一九五五年に「少女の友」が、続いて五九年に「新女苑」が休刊、一九七二年の「週刊小説」創刊まで、文芸部門は衰退の一途を辿る。二〇〇九年三月に発売された「少女の友」一〇〇周年記念号は異例のヒットとなったが、現在、東野圭吾の書き下ろしミステリーが売上トップを走る。二〇一三年一月、創刊三年目となる実業之日本社文庫から、〈無頼派作家の夜〉（七北数人編）と銘打ち、太宰『桜桃・雪の夜の話し』、安吾『墮落論・特攻隊に捧ぐ』、織田『夫婦善哉・恐るべき女』が同時刊行され、二つの〈無頼派〉座談会も収録された。



『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』
(新潮社)



『富獄百景』(新潮社)

新潮社／斎藤理生

新潮社は、佐藤義亮によって一九〇四年五月に雑誌「新潮」の発行先として出発した（前身となる新声社は一八九六年七月の創立）。以後、今日まで続くこの文芸誌を軸に、「文章倶楽部」（一九二六・五〜一九二九・四）「小説新潮」（一九四七・九〜）「週刊新潮」（一九五六・二・一九）などの雑誌、『世界文学全集』（一九二七・三〜一九三〇・五）『新興芸術派叢書』（一九三〇・四〜）『純文学書下ろし特別作品』（一九六一・六）などのシリーズ、新潮文庫（一九一九）などを出版して、日本における代表的な文芸出版社としての地位を確立している。その軌跡は、河盛好蔵『新潮社七十年』（一九六六・一〇）や百目鬼恭三郎『新潮社九十年小史』（一九八六・一〇）といった社史にくわしい。

太宰治は雑誌「新潮」との関わりが深い。一九三五年から四八年まで継続的に作品を発表し、『斜陽』（一九四七・七〜一〇）のようなベストセラーも、「走れメロス」（一九四〇・五）のような後に作家の代表作と見なされるようになった作品も発表している。植崎勤、野平健一といった同誌の編集者との密な交流もよく知られている。

一方で、単行本の発行元としては、そこまで継続的な関係はなかった。太宰は戦前戦中に二〇冊以上の単行本を出版している。そのうち新潮社から出たのは三冊である。『虚構の彷徨、ダス・ゲマイネ』（一九三七・六）と『富獄百景』（一九四三・一）で、前者は「新選純文学叢書」、後者は「昭和名作選集」というシリーズ中の一篇である。各々の巻末には当該叢書・選集の広告が載っている。その広告は当時の作家の立場も反映している。

「新選純文学叢書」には「常に時代の激流の中を進みながら、敢へて藝術の本道を守る若き作家の精鋭をすぐつて本叢書をつくる」と記されて、堀辰雄、福田清人、富澤有為男、伊藤整、大鹿卓らの著作と共に太宰治著『虚構の彷徨』も掲載されている。一方、「昭和名作選集」には「現下第一線に活躍しつゝ、ある中堅諸家の作品を選集して、昭和新代の『代表的名作選集』を刊行する」と記されている。第一集は横光利一、第二集は川端康成であ



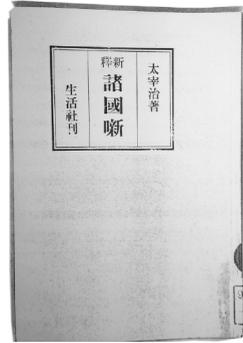
『斜陽』（新潮社）

り、やがて一七集に石川達三、一九集に高見順など、同時期に文壇に登場した作家たちの名前も見られるようになる。『富嶽百鬼』は二八集にあたる。当時の新潮社の出版物からは太宰が新進作家としてデビューした後、先頭集団からはやや遅れながらも、中堅作家の仲間入りをしていった足跡がうかがえる。

しかし戦後、太宰は一中堅作家ではなくなる。『斜陽』が文壇の枠を超えて話題になったからである。ただ見落とせないのは、新潮社が『斜陽』を単行本化した一九四七年二月に、第一創作集『晩年』を文庫化してもいた事実である。中絶していた新潮文庫の復刊は一九四七年七月。初年度に刊行された作品には川端『雪国』、横光『紋章』、林美美子『放浪記』、谷崎潤一郎『痴人の愛』、武者小路実篤『友情』など、著名な作家の代表作が並ぶ。このころ新潮社出版部の社員であった野原一夫は、『新潮』に連載中の『斜陽』は好評だったし、戦後太宰さんの読者も急激にふえてはいたが、広汎な読者を対象とする文庫の性格からいって『晩年』を最初のレパートリーに入れるには危惧する声もあった。将来を考えて布石を打っておく必要もあるのではないかと私は主張した」と回顧している（『回想 太宰治』一九八〇・五、新潮社）。

翌年六月の死の直後には、『晩年』『女の決闘』『斜陽』が「太宰治代表作選集」として出版されている。ここでは「初期」「中期」「後期」と、作家の創作活動を三期に分ける枠組みも既に示されている。さらに、八雲書店版全集の中絶後には、『太宰治集』上・中・下（一九四九・一〇）～一九五〇・一）を刊行している。そこでも代表的な作品を押さえつつ、『バンドラの匣』のような、八雲版全集では未収録に終わった作品もカバーしている。

新進・中堅作家時代から太宰をフォローしていた新潮社は、その名が知れ渡ったとき、多くの作品が読まれる機会を設けた。その啓蒙的とも言える熱意ある姿勢と、したたかな営業戦略は、現在も全作品を収めている新潮文庫に引き継がれている。



『新釈諸国噺』（生活社）

生活社／滝口明祥

創業者の鉄村大二是広島出身で、一九三〇年に早稲田大学を卒業した後、「婦人画報」を刊行していた東京社（現・ハースト婦人画報社）に入社、「コードモノクニ」などに関わる。東京社を退社して一九三七年に創業したのが生活社である（河内紀「訪ね人の時間78」、「彷彿月刊」二〇一〇・一〇を参照）。

「中国文学」、「東亜問題」という二つの雑誌の他、米倉二郎『東亜地政学序説』（一九四一）などの「東亜研究叢書」、徳齡『西太后に待して』（一九四二）などの「中国文学叢書」、吹田順助『パンと見せ物』（一九四二）などの「生活叢書」、田中秀央『ラテン文学史』（一九四三）、のち一九八九年に名古屋大学出版会から復刻されている）などの「ギリシアラテ叢書」を刊行。文学関連では太宰治『新釈諸国噺』（一九四五・二）の他、春山行夫『満州風物誌』（一九四〇）、横光利一『刺羽集』（一九四二）、巖谷小波『定本小波世界お伽噺』（一九四三）などがある。また、鉄村自身が翻訳を担当したM・フラック『揚子江ノアヒル』（一九三九・二）という絵本も刊行されている。

一九四〇年から刊行開始された冊子「婦人の生活」は装丁やレイアウトを佐野繁次郎が担当し、「廃物利用」の宣伝や「国防服」の普及を図るという目的のもとに、大政翼賛会の肝入りで刊行された（河内紀「鉄村大」と「生活社」）、『彷彿月刊』二〇〇二・三を参照。年一回、全十冊の刊行が予定されていたが、一九四二年に四冊目を出したところで打ち切りとなった模様。なお、佐野の弟子で、当時大政翼賛会宣伝部で働いていた花森安治が戦後に創刊した「美しい・暮しの手帖」は、判型、デザイン、レイアウト、執筆陣に至るまで「婦人の生活」を大幅に参考にしている（河内紀『解体旧書——古本探偵2』二〇〇・五、北宋社を参照）。

終戦直前の一九四五年六月に刊行開始された「日本叢書」は、三十二頁前後の薄い小冊子のシリーズだが、翌一九四六年一月にかけて九十冊以上も刊行されている。中谷宇吉

郎によれば、「東京の大半が戦火によつて焼けてゐた頃、(略)東京中の出版者は茫然として為すところが無かつた。鉄村君はその際に「防空壕の中で読む本」を世に送りたい、それには粗末な紙の小型本でよいから内容の出来るだけ高いものが欲しいといふことを言つてゐた。それで始めたのが『日本叢書』であつた」(『春艸雜記』一九四七・一、生活社)。「日本叢書」に掲げられた発行者のことは、以下のようなものである。

われわれを生み育ててくれた日本 この日本のよいところをもつとよく知り 良くないところはお互ひに反省し すぐれたもの数々をしつかりと身につけ どんなどきにも ゆるがずひるまず大きく強く伸びて行く もととなり力となる そんな本をつくりたい。

柳田国男は『炭焼日記』(一九五八・一一、修道社)の一九四五年六月二八日の項で、生活社から「日本叢書」が送られてきたことを述べたあと、「自分も一冊書いてみる気になる」と書いている。生活社は柳田の『国史と民俗学』を刊行した一九四四年から「民間伝承」の発行元も引き受けていた。ただし、柳田は結局「日本叢書」の一冊を執筆することはなかつたようだ。

鉄村大二是「日本叢書」刊行途中の一九四六年六月に亡くなり、息子の真二が跡を継いだ。生活社は次第に経営がうまくいかなくなり、一九五〇年頃に倒産した。

ちなみに、「中国文学叢書」の一冊である劉半農『賽金花』(一九四二・八)の翻訳も担当している竹内好は、鉄村が「出版だけでなしにもっと深く軍に関係していた。つまり軍の金をもらっていた。(略)生活社は自前で『東亜問題』っていう雑誌を出しているんだが、これは占領軍に対する印象がまずい、その印象を消すために、『中国文学』をもういっぺんだすことを考えた。そして変なものを出した」(『中国と私』、「未来」一九六九・二)と悪意を剥き出しにした証言を残している。



『千代女』(筑摩書房)



『お伽草紙』(筑摩書房)

筑摩書房／長原しのぶ

筑摩書房は一九四〇年六月に刊行した『中野重治随筆抄』、『文芸三昧』(宇野浩二)、『フロオベルとモウパッサン』(中村光夫)から出版する。

この三冊を足がかりとして、お先まつくらな戦時体制下に、ずぶの素人の古田晁が、日本の出版界に第一歩を踏み込んだのであった。めくら蛇におじずの感もあるが、古田晁には、「ともかく、いい本を出したい」という願いがあり、その同志に編集企画を受け持った白井吉見がいた。このとき、明治三十九年生れの古田晁は数えの三十五歳、白井吉見は一つ年上で、長野県立伊那中学校の国語の教師であった。(和田芳恵『筑摩書房の三十年』一九七〇・一二、筑摩書房)

小山書店の速見敬二は当時の筑摩書房について「筑摩書房が出来たとき、みんな驚いた。いろんな企画をやるので、どこでも驚異的だったわけですね。ところが、いかにも素人くさいでしょう。やること、なすことね。」(前掲書)と述べているが、これは、太宰治の『千代女』(一九四二・八)刊行エピソードからも窺える。白井が『一つの季節』(一九七五・一一、筑摩書房)の中で「二人を結ぶ友情のごとき、再び地上に実現することはあるまい」と描いたように、この頃すでに古田と太宰は親しい関係にあった。『筑摩書房の三十年』によれば、『千代女』の装幀の阿部合成は太宰と同郷であり友人であった。そのため、太宰は古田に最高の装幀料(相場の倍近い五〇円)を要求する。古田は太宰の顔を立てて支払うが、その翌日、再び社を訪れた太宰と阿部から「みんな呑んでしまって、そのうえ足を出したから、もう一度払え」と言われる。結局、古田は『千代女』の装幀料に一〇〇円を支払っている。このようなやり方から筑摩書房は、「金に糸目を付けず、売れようが売れまいがお構いなしに、一級品を出版する」(前掲書)と注目される。

その後、「本屋には背骨がいります。精神の鎖国をおしつけられている今のような時世にこそ、ポオル・ヴァレリーの全集を出したい」(前掲書)と考えていた竹之内静雄が加わり、

精力的に出版活動を展開し、一九四一年には太宰治の『千代女』を含め一六冊の小説と訳書を発表し、同時に最初の全集企画である『ヴァレリーの全集』の刊行を開始する。一方で、時代は出版業界にとって厳しく、紙の供給は激減し、一九四三年には「年間五万ポンド以上の割当用紙実績がない出版社は、他社と合併するか、買収しなければ、有資格者も生き残ることができない」(前掲書) 状況にあった。そのため、白井は「戦力」の根拠である日本精神の親戚筋とみられている国文学関係の企画(前掲書)での用紙獲得を目指し、古田と竹之内は合併と買収に奔走する。筑摩書房は、龍星閣、黄河書院、七丈書院、明治書房などを買収しこの危機を乗り越える。

戦後になり、筑摩書房は一九四三年に『中野重治選集』(二月)、『井伏鱒二選集』(三月)、『シェイクスピア選集』(六月)、『筑摩選集』(十一月)、『ブルクハルト著作集』(十一月)と次々に選集を手掛けて勢いづく。しかし、そのような状況でも造本に手を抜かないやり方を続ける社の経営は困難に陥っていた。その筑摩書房を救ったのが太宰である。一九四八年六月一九日に太宰が玉川上水に入水したことで騒いだ新聞、ラジオの影響により、筑摩書房から刊行された『ヴィヨンの妻』(一九四七・八)が売切れ、『人間失格』(一九四八・七)は筑摩書房初のベストセラーとなった。「当時、口のわるい業界で、太宰治が死んで、息を吹き返した出版社がふたつある、と陰口が言われた。新潮社から出た、『斜陽』ももちろんベストセラーになったが、経営ががちりしているから、ふたつの出版社のうちにはいらない。筑摩書房と、『太宰治全集』を出していたY書店のことである」(前掲書) というように戦後の出版業界を更に前進する足掛かりを築くのである。



『女性』（博文館）

博文館／平 浩一

博文館は、大橋佐平が一八八七年に創業した出版社である。「太陽」「文藝倶楽部」「文章世界」などを刊行し、明治から大正期にかけて特に大きな進展を見せた。しかし、「買切制」にこだわり続けたため、「キング」が一〇〇万部を突破した一九二七年に「太陽」が終刊するなど、やや力を失っていく。それでも、ほぼ同時期に「新青年」等が人気を博し、昭和期も多彩な動きを見せていった。

その「新青年」も、戦時下において探偵小説の掲載が困難になり、時代小説や時局に寄り添った記事が増えていく。博文館全体も同様に、一九四一年から翌年にかけて刊行された単行本のリストを見ると、『大陸発展叢書』『興亜全書』『支那語辞典』『大東亜共栄圏』『大東亜戦争要図』などの名が並ぶ（参照：大久保久雄編『博文館研究資料年表（一八八五—一九九四年）』『東海大学紀要課程資格教育センター』一九九四・三）。

こうした情勢の中で、一九四二年六月、太宰治が博文館から刊行した単行本が『女性』であった。担当編集者は、「日曆」や「人民文庫」ともかわりのあった石光葆である。「このたびは、いろいろ御世話になる事と存じます。よろしくお願ひ致します」という同年一月二二日の挨拶を皮切りに、太宰の石光宛書簡が多く残されている。なお、同書簡には、「阿部合成君には、私からお願ひして快諾を得ました。信頼できる人ですから、安心して話合つてやつて下さい」という形で、装幀の担当も太宰が決めていたことが分かる。

この年から、「新青年」が用紙統制により大幅にページ数が削減されたことなども含め、同時代の情勢をふまえると、本単行本はやや異彩を放っている。「あとがき」には、「女の独白形式の小説ばかりを集めて一本にまとめてみた」と記され、最後に収録された「待つ」は「京都帝國大學新聞」に依頼され執筆したものの、時局にふさわしくないという理由で掲載が見送られた作品であった。なかには、巻頭の「十二月八日」と最後の「待つ」を併せ見ることで、この単行本に「戦争の終結」という意味あいも強くある」という指摘も為

されている（渡部芳紀『女性』——女の独白形式『国文学』一九九一・四）。

単線的な見方は決して出来ないが、太宰が単行本の中で、「待つ」の存在にこだわっていたのは事実であった。二月二〇日の石光葆宛書簡には、以下のように記されている。

ただいま、別封速達で、「待つ」といふ新原稿、お送り致しました。五枚の短篇ですが、あの「恥」といふ作品の次に（つまり、「恥」と「あとがき」の間に。）入れて下さいまし。最後の、しめくりに適した作品だと思ひますから、どうか、そのやうに、お願ひ致します。目次の校正も、もういちどやつて、「待つ」を入れて下さい。これは京大の新聞に送つたのですが、間に合はず、原稿のコピーを送つてもらつたのです。（圏点）原文

さらにその四日後、太宰は再度速達で、石光宛に「先日お送りした「待つ」は、「恥」の次に組み入れて下さいまし。目次の校正の時も、そのやうに直して置いて下さいまし」という文書を、図まで記入しながら送っている。以上のやりとりを見ても、巻末を飾った「待つ」への太宰の思いは、非常に強いものだったことが分かる。しかし、同時に見逃せないのが、三月二九日の石光宛書簡である。そこには、次のように記されている。

私の結末の短篇「待つ」といふ題は、いよいよ、心配になりました。つまらぬ誤解を受けたくありませんので、どうか、題を「青春」と改めて下さいまし。目次も、どうか、そのやうにタノミます。念のために再度お願ひ申し上げます。

こうして見ると、この単行本に「戦争の終結」という意味あいも強く、あると直線的に断ずるのも、なかなか困難である。巻頭に「十二月八日」が配置され、「待つ」に「つまらぬ誤解を受けたくありません」と語り、「青春」という改題を提起していたことを含めて考えると、明確な（抵抗）の姿勢というよりも、時局に寄り添いながら、そこからのずれや逸脱をもたらそうとする太宰の姿勢が、ここに垣間見られるのではないだろうか。



『新ハムレット』（文藝春秋社）

文藝春秋社／平浩一

太宰治と文藝春秋社との関係は、従前から「芥川賞」をめぐる動向が特に強く注目されてきた。それに比すと、太宰の作家活動全般とのかかわりについては、それほど多く論じられていない。「芥川賞事件」については、紙幅の都合上、ここで詳述することは避けるが、この「事件」によって両者に距離が生じたことは、屢々指摘されてきた通りである。

例えば、初期の代表作である「狂言の神」は「文藝春秋」に掲載されず、佐藤春夫宛の書簡で「めそめそ泣きました」、「佐藤さん。このさい、どうすればよいか。知らせて下さい。別の雑誌へ持つて行くべきでせうか」などとうたっていた（一九三六・五・一八）。また、太宰の「創作年表」には、一九三七年の末尾に「惇徳の歌留多文藝春秋」という言葉が黒く塗りつぶされており、それについては、津島美知子が「長年、作者が構想を抱き続けてきた小説」で「ぜひ『文藝春秋』で発表したいと望んだ」ものの、「かなえられなかった」と述懐している（『回想の太宰治』一九七八・五、人文書院）。

ところが、一九四一年になると、事態は一変する。「服装に就いて」が「ダス・ゲマイネ」以来、約六年ぶりに「文藝春秋」二月号に掲載され、七月には、単行本『新ハムレット』が、「書下し長篇小説」として文藝春秋社から刊行されたのである。

『文藝春秋』六月号の「出版春秋」欄には、太宰治の単行本刊行への「抱負」が掲載されている。そこで太宰は、「二月、三月、四月、五月、四ヶ月かかってやつと書き上げた」、「なるべくなら再読してみて下さい」と述べており、その力の入れ具合が分かる。また、文藝春秋社側も、翌七月号「出版春秋」欄で『新ハムレット』刊行を紹介している。

「新ハムレット」は二十世紀の青年の旗手として自他共に許す鬼才太宰治氏が、材を沙翁のハムレットに藉りて、不幸な家庭を描いた苦悩の書下し長篇小説である。ハムレットの人物に材を藉りた小説では、我々の周囲にも、志賀直哉氏、小林秀雄氏などの作があり、何れも種々な問題を含んだ傑作であるが、太宰氏のこれも新しい世代の

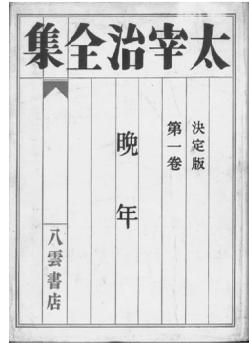
問題作であらう。

匿名で書かれたこの紹介文は、興味深い要素を孕んでいる。「太宰治三期説」に従うならば、この頃の太宰は「中期」に属し、私生活も作風も安定していた時期とされる。ところが、この紹介文を見ると、「二十世紀旗手」の存在、あるいは「青年」がテーマのひとつとなった「道化の華」の存在を想起させる文章を組み込み、その上で「鬼才」と太宰治を語り、「問題作」という形で『新ハムレット』を紹介している。ここから、いまだ「芥川賞事件」の頃の〈作家イメージ〉が、「太宰治」に残存していたことが見えてくる。

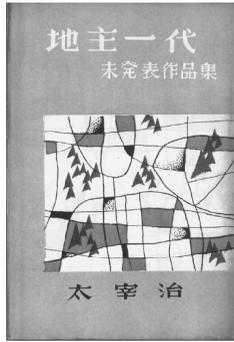
その後、死去するまで、太宰は『文藝春秋』に小説を寄稿することはなかった。しかし『創作年表』には、実に多く「文藝春秋」という言葉が並んでいる。四六年四月号、六月号（二度）、九月号、十二月号、四七年一月号、二月号の項すべてに「小説文藝春秋20」と記され、そのすべてが「抹消」されているのだ。津島美知子は次のように述懐している。

（一九四六年——引用者注）六月号への注文は小説が『文藝春秋』『光』『太平』等十三誌から、随筆は十二誌からきていて、もはやとうてい、応じ切れぬ数に上っていた。依頼のあった順に横書きに書き入れてゆき、そのうち執筆した一、二篇を残してことわった注文は抹消している。人気作家への階段を昇り始めている証拠で得意な気持が伝わってくる。（『回想の太宰治』前出）

戦後の「創作年表」で七度も「抹消」された「小説文藝春秋20」という記載は、同じく「創作年表」にて「抹消」された「悖徳の歌留多」や、「狂言の神」をめぐる事情とすいぶん異なる。スキヤンダラスな「芥川賞事件」だけでなく、四二年の「服装に就いて」や『新ハムレット』の存在、あるいは、戦後の流行作家としての展開も含め、文藝春秋社との関係を捉え直したとき、出版媒体における〈職業作家・太宰治〉の位置づけの移り変わりが、また違った形で浮かび上がってくるのである。



全集（八雲書店）



「地主一代」（八雲書店）

八雲書店／吉岡真緒

八雲書店は中村梧一郎が大日本連合青年団の機関誌「青年」の編集者を経て独立、創業した（『日本近代文学大事典』二、一九七七・一一）。太宰の構想や意向に基づく初の『太宰治全集』（一九四八・四―一九四九・一二）を決定版と銘打ち刊行したが、未元に終わった。戦後の出版部門は哲学、文芸、農学。「八雲」、「短歌新潮」、「藝術」等の雑誌を発行。また、一時「近代文学」の発売所を担う一方で、中野重治・小田切秀雄編『日本プロレタリア文学発達史資料』（全八巻中第三巻（一九四八・一一）のみ確認、未刊）を刊行した。太宰と八雲書店との関わりは、新庄嘉章編集の芸術誌『藝術』創刊号（一九四六・七）への「チャンス」掲載が端緒と思われる。短歌雑誌「八雲」が文芸誌へと一新された号（一九四八・六）には「女類」が掲載された。太宰没年には「八雲」「藝術」で追悼特集がさらに「太宰治未発表作品集」（「八雲」一一・二月号）も組まれた。太宰の著作物は全集の他に『地主一代』（一九四九・四）、『グッド・バイ』（一九四九・六）がある。

社長の中村は、八雲書店創業前に同人雑誌「星座」の創刊、編集を手がけた経歴を持つ。この創刊号（一九三五・四）の巻頭を飾ったのが、後の第一回芥川賞受賞作、石川達三「蒼氓」である。石川とは創業後も関わりが続き、『石川達三選集』（一九四七・一二―一九四九・六、未刊）が『太宰治全集』と同時期に刊行された。ちなみに『文藝年鑑 昭和二三年度版』（一九四八・九）には両書を掲げた八雲書店広告の隣に文藝春秋社広告が掲載されている。このときの広告には他に、『岸田國士長編小説全集』、『豊島與志雄童話全集』、『ステイブンソン小説全集』、『デイドロ著作集』、『現代中国講座』の記載がある（一部現物と表記の相違、刊行未確認あり）。なお『石川達三選集』第一巻には、別の本ではGHQに削除命令を受けて変更された表現が元に戻されていたにもかかわらず、事前検閲をくぐりぬけて収録されている（筆禍をたどって、「朝日新聞」二〇二二・九・六）。

八雲書店が『太宰治全集』の発行元に決定されたのは一九四七年一〇月頃とされる（野



「グッド・バイ」(八雲書店)

原一夫『回想 太宰治』一九八〇・五、新潮社、山内祥史『太宰治の年譜』二〇一二年・一、大修館書店。全集刊行を持ちかけたのは「原稿を書いてもらえない心のあせりから、いかに八雲書店が太宰さんの作品に執心しているかという姿勢をみせたかった」編集者亀島貞夫の「思いつき」であり、「とても承諾してもらおうとは思わなかった(前掲山内書)、「偶然」(亀島貞夫『道化の文学』一九八一・九、群馬司法書士会、群馬青年司法書士協議会)の結果が刊行の運びとなったという。実業之日本社からも同時期に申し入れがあり、話し合いで八雲書店に決定した。とはいえ当時八雲書店の「編輯部の大方の意見は、全集ではなく選集説」(前掲山内書)であったという。野原も自著で、それまでの日本出版界では稀な作家生前の全集刊行に「釈然」としなかったものの「お出しになるんなら、筑摩書房がいいんじゃないんですか」と提言したところ、太宰が「筑摩で出してもらえれば言うことなのだがね。しかし、無理は言えない」と応えたと回想している。

戦後一時活況にあった出版界は全集刊行開始の一九四八年には不況に陥り、翌年にはかつての円本を思わせる一冊百円の廉価な全集物企画が話題となるデフレにあった。一冊二二〇〜三八〇円の『太宰治全集』には厳しい状況だったと考えられる。新潮社が前年末に文庫(六〇円)、翌七月に単行本(二七〇円)で『晩年』を刊行したことへの配慮から第三回配本となった第一巻『晩年』(一九四八・九)は三三〇円で、第二版が一九四九年五月に刊行された。太宰は編集方針や装幀や口絵決定に熱心に関わった様子の書簡を残しているが、第二回配本を待たず自裁を遂げる。太宰急逝により当初全一六巻の予定だった全集は編集内容変更のうえ全一八巻に増加された。八雲書店は「太宰治が死んで、息を吹き返した出版社」と陰口をたたかれるも第一四回配本第一五巻を最後に倒産し、未完の全集は廉価なゾッキ本として市場に投げ出された(関井光男「太宰治とテキスト」、『太宰治全集』月報一三、筑摩書房、一九九九・五)。



『太宰治随想集』(若草書房)

若草書房／吉岡真緒

若草書房は『太宰治随想集』(一九四八・三)を刊行した出版社である。奥付には「発行者佐藤恒二」とあり所在地は東京である。出版社からの注文帳を兼ねた太宰直筆の「創作年表」を見ると、単行本文表の頁の「正義と微笑」永晃社(杉村一嘉)と「雌について」杜陵書院(桑島喜平)の間に『太宰治随想集』若草書房 佐藤恒二」と若草書房の所在地の筆記がある。この頁には、ところどころの題名の上に「受取」の文字と数値が書き込まれている。おそらく印税の内金と思われるそれは、若草書房の場合「八〇〇〇、二〇〇〇」であり、二回に分けて一万円受け取ったと推定される。先述の永晃社も杜陵書院も、合計一万になる「受取」の数値が記入されている。一九四七年一月七日付堤重久宛書簡の「正義と微笑」の件、僕すでに一万円印税前借しちやつてゐるので、いままら、どもならんのだよ」との記述から、前借して受け取り済みの金額と思しい。ちなみに当時の初版の発行部数は大体二、三千部(『出版年鑑』)である。『太宰治随想集』は一九四八年三月に二〇〇円で初版が刊行され、同年七月に口絵を加えた再版が一四〇円で刊行されている。

『出版社・執筆者一覽』(日本出版協会)に前述の若草書房が載るのは「昭和三三年度版」(一九四七・二)から。出版部門は文芸、思想。『文藝年鑑』に若草書房が載るのは「昭和三二年度版」(一九四九・九)から「昭和三三年度版」(一九五〇・六)までである。「昭和三三年度版」(一九五七・六)にも同名の出版社があるが、奈良市の住所で代表者も異なる。『出版年鑑』(出版ニュース社)には奈良市の若草書房のみ「昭和二七年版」(一九五二・六)から確認出来る。

『太宰治随想集』以外の若草書房の一九四八年刊行物は、五月に亀井勝一郎『恋愛美学』、六月にエドガア・アラン・ポオ／吉田健一訳『赤い死の舞踏会』、マルキ・ド・サド／中谷太郎訳『ふらんす浮世草紙』、シルレル／高橋義孝訳『リアリズムと憧憬の文学』、七月に

稲垣足穂『悪魔の魅力』、八月に湯浅芳子訳『ツルゲネーフ選集六』、九月に芳賀檀『R.M. リルケ』、アルフレッド・ミュッセ／江口清訳『恋に生きなん』、サケッテイ、パンデルロ他／杉浦明平訳『イタリヤ浮世草紙』、モウパッサン／秋田滋訳『結婚の夜の悪戯』、一〇月に河上徹太郎『新聖書物語』、一二月にジョン・ロック／鳥井博郎訳『デモクラシーの本質』等。版權が切れた翻訳物が多い中、稲垣足穂の著作が目を引き。敗戦後の出版界は、GHQの支配下で「戦争中の文化鎖国から急に国際的な拡りを求めても翻訳権は容易に決定され」なかつたため「著作権を失つた古典物に集中」された翻訳物が「おびただしく出版された」という。「日本人の責任と義務を自覚させ、日本占領の目的を推進するに役立つものを原則」として「外国出版物の翻訳権に対する第一回の入札」が行われたのは一九四八年五月である（『文藝年鑑 昭和二十四年度版』）。

『太宰治随想集』には一九三五年から一九四六年までの「随想」五二篇が収められている。未完に終わった八雲書店版『太宰治全集』（一九四八・四〜一九四九・一二）の内、第一七卷「感想集」と第一八卷『未発表作品・補遺』は未刊のままだったことが最後の配本である。第一五卷巻末広告に知られるため、『太宰治随想集』は図らずも全集を補う書となった。なお本書には最後の二篇として、現在の全集ではもちろん、八雲書店版全集でも小説に分類される「フォスフォレットセンス」と「朝」とが含まれている。『太宰治随想集』が太宰生前の刊行であることを考えると、二篇が収録されたことは興味深い。

「右大臣実朝」(錦城出版社)



錦城出版社／大國眞希

著者から許諾が得られていないため非公開



月曜荘／大國眞希

著者から許諾が得られていないため非公開



「信天翁」(昭南書房)

昭南書房／小澤 純

昭南書房は、太宰初の随筆集『信天翁——太宰治文藻集——』(一九四二・一一)を出版している。「東京市豊島区雑司ケ谷町六ノ八一」(奥付)にあったが、社名からは、一九四二年二月の〈陥落〉以後、シンガポールが「昭南島」へと名を改められた余波を感じる。発行者の西谷操が中村重義・佐藤俊雄と共に同社を創立したのは同年一月、ジャーナリズムには「昭南」の二文字が溢れていた。例えば神保光太郎「昭南日本学園」(一九四三・八、愛々事業社)は、「学園長」として「過ぎる一年を新生昭南に在つて、陥落後の文化工作に当り、十一月末飛行機で帰還」するまでの記録で、同校では従軍記者として現地入りした井伏鱒二が教壇に立った。昭南書房は『信天翁』と同年同月に井伏『星空』(中外商業新報)連載の「星座」を改稿を上梓(共に五千部)、出版事業を開始する。

西谷は一九〇三年鹿兒島生まれで、本名は小助、操は編集者・出版人としての筆名である。また秋朱之介という筆名を用い、詩人・装幀家として知られた。福岡勝監修『出版文化人物事典』(二〇一三・六、日外アソシエーツ)では「限定版製作者・詩人」と紹介されている。秋『書物遊記』(一九八八・九、書肆ひやね)に収められた荻生孝「秋朱之介とその時代」及び「書目一覽」が、特異な足跡を追う。一九二〇年上京、同人誌「奢(ば)覇(は)都」に参加、堀口大學の訳詩集『月下の一群』(一九二五・九、第二書房)に衝撃を受け師事、また「変態・史料」に詩を投稿した縁で文芸資料研究会編集部に身を置き、美麗な装本を手掛けるようになる。「書痴」を自任し、限定本出版に心血を注ぎ、一九三二年には以士帖印社を創立、堀口の親友であった佐藤春夫の詩集『魔女』を同年一〇月に刊行、翌年五月には特装本を出す。一九三三年には三笠書房に入社し内田百閒の装幀や雑誌「書物」の編集を担当、会員制の日本限定版倶楽部や、堀口の著作・翻訳に限って贅沢本を刊行する裳鳥会限定倶楽部を立ち上げた。退社後は多くの限定本書肆に関わりながら、第一書房の客員として永井荷風の訳詩集『珊瑚集』(一九三八・三)の特装本を手掛けた。出発期の太宰は、

「葉」(「鶴」一九三四・四)のエピグラフで堀口訳『ヴェルレエヌ詩抄』(一九三二・八、第一書房)の「智慧」を効果的に引用しており、二人には確かな縁がある。

萩生によれば、「贅沢本の許される時局ではな」い中での同社創立の影には、「N製紙会社の某氏」という「理解ある投資家」がいた。『星空』は「よく売れた」が、西谷は「限定版として刊行されてほしい本」(「本」一九三三・九)として、早くから井伏の「朽助のゐる谷間」(「創作月刊」一九二九・三)を挙げていた。また、石川淳『山桜』(一九四二・一二)は、西谷が関わった版画荘文庫版(一九三七・一二)に基づき、表題作は自身がモデルであったとされる。中川一政の詩集『野の花』(一九四三・六)の自装について、萩生は「表紙の木版画の黄色が目には鮮やかであるが、前後の見返紙の蟬と鍬形の白雲母刷は、なんと手が込」むと絶賛するが、歌集『向ふ山』(同・二〇)も岩場や野鳥を瀟洒にデザインし美しい。無地の装幀が目を引く『丸山薫詩集』(同・二)、室生犀星『余花』(同・三)、網野菊『雪の山』(同・八)、岡本一平編『かの子短歌全集』(同・一〇)、河東碧梧桐『子規の回想』(一九四四・六)、翻訳ではベルトラン『夜のガスバアル』(同・二)やウルフ『波』(同・四)、「書物」の寄稿者であった横山重の『室町時代小説集』(同・一二)も注目される。『信天翁』刊行に、井伏経由で交流した詩人・高梨一男が関わった事実が、「私の著作集」(日本学藝新聞 一九四一・七・二〇)に「高梨書店から『信天翁』が出る筈です。『信天翁』には、主として随筆を収録しました。七月までには、みんな出るでせう。」と記し、高梨宛書簡に「随筆集については、そのうちまた相談させよう」(一九四二・七・二四付)や「昨日、昭南書房の佐藤氏来り、検印五千部を押させて、さうして印税三千部代だけ、まづ、下さいました。〔略〕いい本ができる様子で、おかげさまと深く感謝いたします」(同・一一・一九付)とあり推測できる。その後、同社は操書房と名を変え、戦後、堀口の翻訳や山本周五郎の初期作品を精力的に刊行していく。



『薄明』（新紀元社）

新紀元社／斎藤理生

新紀元社は一九四〇年八月の創立。戦時中には文学よりも、政治・社会・経済に関わる時局的な書籍を主に出版していた。近衛文麿の題字を掲げ、「政治経済に何の予備知識もない国民に、新体制の全貌とかくあるべき姿を出来るだけ判りやすく手解さし」た大渡順二『新体制読本』（一九四〇・一〇）や、五・一五事件や二・二六事件の「真相」を中心に、ワシントン会議から三国同盟に至る激動の二〇年間を描いた満田巖『昭和風雲録』（一九四〇・一二）などである。後者は翌年五月までに一三〇版を越すベストセラーになった。

一方で、一九四二年ごろから文学関係の出版物も見られるようになる。たとえば井伏鱒二・海音寺潮五郎現地編輯『作家部隊随筆集 マライの土』（一九四三・三）である。この本には編者の他に、小栗虫太郎や中村地平など、多彩な作家の随筆を収められている。

戦後になると、重心が文学書へと移る。一九四六年四月から九月の間に、川端康成『日雀』、高見順『遠方の朱唇』、前田夕暮『耕土』、野田宇太郎『すみれうた』、古谷綱武『愛情と教養』など、小説・歌集・詩集・感想集と、多彩な文学書が立て続けに出版された。並行して『吉野作造博士民主主義論集』全八巻（一九四六・八―一九四七・九）も刊行されており、時代状況にふさわしい出版社に生まれ変わろうとしていた様子がわかる。

太宰治は田中英光宛書簡（一九四五・九・二三）で、「私のところへ原稿ほしいと言つて来てゐるものの中で主なるところ」として、経国社・鎌倉文庫と共に新紀元社を挙げている。「いづれも仲々の意気込みです」とも書いており、この熱意が『薄明』（一九四六・一）の出版に結実したと考えられる。未発表の「薄明」や、戦時中に削除処分となった「花火」（「文藝」一九四二・一〇）を「日の出前」と改名して収録している点に、作家の意欲もうかがえる。残念なのは、表紙の作者名が「大宰治」と誤記されていることである。



「愛と美について」(竹村書房)



「皮膚と心」(竹村書房)

竹村書房／長原しのぶ

小田嶽夫は竹村書房について次のように述べている。

竹村書房の主人竹村坦は、書房を開く前は改造社の営業部にいた人で、同じ部にいた大江勲を誘って協力者とし、あとは小僧さん一人というささやかな規模で経営していたのであった。当時は改造社や中央公論社で文芸ものの出版をやっていたにはいたが、文芸ものの出版の権威があった新潮社でさえ、文芸書出版は見合わせていた時で、小さいながらこの竹村書房が唯一の文芸出版専門の書肆であった。『文学青春群像』一九六四・一、南北社)

竹村書房では、西瀬英一『南紀風物誌』(一九三四)、室生犀星『慈眼山随筆』(一九三五)、宇野浩二『文藝草子』(一九三五)、下島勲『空谷山房随筆集 人犬墨』(一九三三)、尾崎士郎『人生劇場』(一九三三)などを刊行している。小田光雄によれば、「円本時代が終った昭和六年から十年頃にかけて、大量生産、大量消費の円本に抗するように、オリジナルな企画、特色のなる装丁造本、丁寧な編集を主体とする文芸書の小出版社が次々に生まれた」(『古本探求Ⅱ』二〇〇九・八、論創社)というが、竹村書房はその内の一つである。とくに尾崎士郎の『人生劇場』は「四六上製版で中川一政による牛と鶏の絵をあしらった装丁が見事であり、尾崎士郎のイメージにかなない、竹村書房の造本のあり方を示している」(小田光雄『前掲書』)ものであり、その後ベストセラーとなった。

一九三七～一九三八年に竹村書房で校正を行っていた平野謙によれば、

竹村書房では大体月二冊ずつ新人の創作集を出して、結構商売がなりたっていたらしい。その部数もおそらく千部以下で、印税らしい印税など払っていなかったのじゃないかと思う。(略)尾崎士郎の『人生劇場』が最初に出版されたのも竹村書房である。おそらく芝書店の『悲劇の哲学』とおなじく、これは竹村書房唯一のベストセラーになったようだ。いや、森田たまの第一小説集も意外によく売れて、竹村書房はあわて



「老ハイデルベルヒ」(竹村書房)

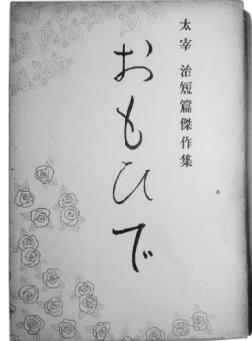
た。というのは、当時竹村書房の出版物は経費節約のため、ほとんど紙型をとらず印刷していたから、森田たまの小説集が売りきれて、また新組みをしなければならなかったからである。(『平野謙全集第四巻』「文学・昭和十年前後——シエストフ受容」一九七六・七、新潮社)

という。『人生劇場』は版を重ねるが、竹村書房は七版の出版後、その版權を新潮社に移している。その原因を小田光雄は「切実な金銭的事情が絡んでいる」(『前掲書』と推測している。小出版社ゆえの金銭的な問題も抱えていた竹村書房であるが、太宰治との交流を確認するかがり、作家を育てようとする真摯な姿勢を窺うことができる。竹村書房から刊行された太宰の単行本は『愛と美について』(一九三九)、『皮膚と心』(一九四〇)、『老ハイデルベルヒ』(一九四二)だ。その期間、太宰は竹村に次のような書簡(一九三九年五月三二日付)を送っている。

本日は全く望外の印税、それも速達にて御患送下され、お礼の言葉も無き有様でございます。今夜の感激、終生忘却することなくきつと立派な作家になり、必ず必ず御好志にお報い致可く、小生も一個の男兒ゆゑ不遇のうちにはどこされたる御情、ゆめにも忘れることなく御志、必ず裏切ることございませぬ。心に深く銘記して居ります。あれこれ小生のがままも思ひ出され、竹村氏の御海容の情感奮致して居ります。誰がなんと言はうと私は知つて居ります。今後とも潔癖高邁の愛情をお持ちなされよい作家をお育て下さいませう、私もきつとよい作家になり皆様何かおちからになりたいと念じて居ります。

このような竹村書房と作家とのつき合いは太宰に限るものではない。平野謙は「たしか大江さんと坂口安吾とが中学が同級とかの関係で、『吹雪物語』が竹村書房から出版されたようだ。この千枚くらの書きおろし長篇を、坂口安吾は取手とかいうところで執筆したが、その間の最低生活費は竹村書房でみていたらしい」(『前掲書』)と述べている。これらの

あり方から小規模ながらも良質な文芸書を世に送り出そうとする竹村書房の気概が感じ取られる。



「思ひ出」(人文書院)

人文書院／滝口明祥

一九三二年に京都で日本心霊学会として出発した出版社である。創業者の渡辺久吉は愛知県の出身で、仏教専門学校(現・仏教大学)を卒業、自身も渡辺藤交の名で『心霊治療秘書』(一九二四、日本心霊学会)を著している。初期は心霊学の研究書や関連書を刊行していたが、千里眼事件で有名な今村新吉の命名により一九二七年に人文書院と名称を改め、徐々に幅広い出版活動を行なっていくようになる(小田光雄『古本探求Ⅲ』二〇一〇・一、論創社を参照)。

一九三〇年代後半からは文学書にも力を入れるようになり、保田與重郎『英雄と詩人』(一九三六・一)などを出版している。中河与一『文芸不断帖』(一九三六)、岸田国土『時処・人』(一九三六)、佐藤春夫『むささびの冊子』(一九三七)、正宗白鳥『思ひ出すま、に』(一九三八)、田地文子『女坂』(一九三九)など、作家の随筆も多い。

一九四〇年前後になると、作家の自選による短篇小説の傑作集が多く刊行された。太宰治『思ひ出』(一九四〇)もその一つで、他に富澤有為男『夫婦』、大鹿卓『千島丸』(以上一九三九)、寺崎浩『森の中の結婚』、外村繁『風樹』、中谷孝雄『春』、中村地平『陽なた丘の少女』(以上、一九四〇)などがある。

一九四四年に企業整備により立命館出版部などと統合して京都印書館となったが、四七年から人文書院を再開した。久吉の息子である睦久の企画編集によって一九五〇年からサルトルの全集を刊行、以後翻訳ものに力を入れるようになり、ランボーやゲーテ、スタンダールなどの全集を刊行した。一九六六年、サルトル、ボーヴォワール招聘を機に、睦久が正式に二代目社長に就任(『京都出版史』一九九一・三、京都出版史刊行会を参照)。

現在では、フロイトやユングの著作集などの他、歴史や社会学に関する書物も精力的に刊行している。また、太宰関連では津島美知子『回想の太宰治』(一九七八・五)があり、増補改訂版(一九九七・八)も刊行された。



「冬の火花」(中央公論社)

中央公論社／野口尚志

「反省会雑誌」の発行所として一八八六年に設立された中央公論社だが、最も権威ある論壇誌といわれた「中央公論」を発行し続けるなか、軍部・特高に〈左翼的〉との批判を受け、いわゆる横浜事件などを経て一九四四年七月に自発的廃業に追い込まれた。終戦後社長であった嶋中雄作は公社の再建に奔走し、旧社員復帰と蛭山正道・谷川徹三・林達夫らを幹部に迎え入れるなどして、一九四六年新年号から「中央公論」、続いて四月には「婦人公論」が復刊した。出版においては戦前に連載の中絶していた谷崎潤一郎『細雪』上巻の単行本が同年八月に発売され、続編は「中央公論」に連載されることになった(『中央公論社の八十年』一九六五・一〇、中央公論社)。

太宰は中央公論社から『冬の火花』(一九四七・七)を出版している。表題作をはじめ、疎開したまま滞在していた故郷・津軽で書かれた作品を収めた短編集である。出版の経緯は、『太宰治全集』に収録された書簡からある程度知ることができる。それによれば、当初、『パンドラの匣』を当社から出す話もあったらしい。一九四六年四月には編集者・梅田晴夫に「終戦後の私の仕事の中で最もよい出来と思はれる中篇、短篇を集めて」一冊にする旨を書き送っており、八月には、初版部数を一万にして欲しいとの要望と共に、実際の単行本と寸分たがわぬ「目次」(この時点での未発表作を含む)を早くも披露している。太宰は梅田をかなり信頼していたようだが、同年十月頃、梅田は体調を崩して編集の担当が困難になった様子で、太宰は彼の体調と自著の出版の行く末との心配が綱い交ぜになったような手紙を送っている。担当編集者は交代した模様だが、翌年、『冬の火花』は無事に刊行された。

さて、「中央公論」復刊第一号に掲載された「再建の辞 我等の指標」には次の五箇条が記されている。

一、自由なる平和的民主思想を涵養し、世界に於ける日本の地位向上に資したい

- 二、道理と科学的精神とに基いて新日本文化の創造的自主性の確立に努めたい
- 三、真実への愛と勇氣とを以て自ら思考し自ら判断する国民の養成に努めたい
- 四、常に進歩的なる見地に立つて内外の諸問題に関する解説批判を試み、以て健全なる輿論の形成に資したい
- 五、不撓の建設的態度を持して、日常生活の合理化並びに社会事業の改善に貢献したい
- 「創造」「進歩」「建設」といった文字が並んでいる（当時、それ自体は珍しいことではないが）。中央公論社の戦後はこうした自負をもって始まったわけだが、このことは、同社から刊行された太宰治の単行本『冬の花火』に屈指しながらも共鳴しているのを確認することができる。同書に収録の「苦悩の年鑑」では、「保守派」を宣言しながらも、「まったく新しい思潮の台頭を待望する」と述べられている。矛盾にも見えるが、「中央公論」(一九四七・二)の「巻頭言」を参照しよう。「質のよいインテリ」が「保守派」を名乗るという現象に言及した文章である。「世を偽るためとは信ぜられぬほどの熱情をもつて戦争を支持したひとびとが、いまは同じ熱情を傾けて革命を叫んでいる」。対照的に、「インテリが保守派だというのは、一方において節操の尊重あるいは操守への憧れであり、他方において進歩をただ形式的に考えず、深く社会的現実の連続性をつかんだ実質的なものたらしめようという願望をふくむものである」。このことを「保守派」という名称でしか表現できないもどかしさに「日本の悲しい現実」があるといひながら、巻頭言の筆者はこうした姿勢を肯定的に評価している。廃業により断絶期間を経た中央公論社はむしろ戦前から戦後を連続したものとして捉え、そうした「節操」のある「進歩」を期している。「保守派」を宣言しながら「新しい思潮」を待望する太宰とも通い合うところがあつたのは間違いない。



「風の便り」(利根書房)

利根書房／野口尚志

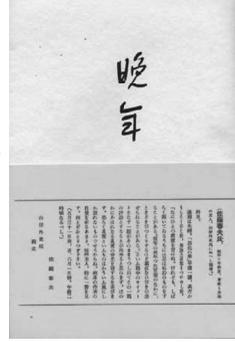
利根書房は、『書籍年鑑』昭和十七年度版(一九四二・八)及び『日本出版年鑑』昭和十八年版(一九四三・一二)、いずれも協同出版社)に社名が見え、以降は姿を消している。判明した限りで、林芙美子『薔薇』(一九四二)の刊行が最も早い。以後、阿部知二『孤愁』(一九四二)、伊藤整『父の記憶』(一九四二)、伊藤信吉『作家論』(一九四二)と続く。太宰治『風の便り』(一九四二)には、「ちかごろ私は、ひどく責任の加重を感じてゐる。大事な時だと思つてゐる。」(あとがき)とあるが、内容は戦時色を殊更に強調するものではない。大室貞一郎『大学及大学生』(一九四二)も文化史・思想史である。このように、文芸・思想を時局とは一線を画したところで扱う路線もあったようだ。

他方、火野葦平『五平太船』(一九四二)、上田広『民族の海』(一九四二)といった戦地からの帰還作家による短編集、ドリユ・ラ・ロシエル／新庄嘉章訳『フランスの生きる道』(一九四二)や、鈴木安蔵『政治・文化の新理念』(一九四二)といった評論を出し、「大東亜共栄圏建設よりも最も内奥の人生諸問題に至るまで」(『政治・文化の新理念』)広告、「明治文化」一九四二・八)という時局に配慮した宣伝文句も見える。この後、森川賢司『日の丸の子供』、大隈俊雄『進む日章旗』、氏原大作『約束』(以上、いずれも一九四三)といった戦地帰還作家による青少年向けの戦意高揚を意図した読み物も出した。

なお、雑誌「明治文化」の出版を一九四二年五月号から引き継いだ。これは吉野作造を中心に大正末に発刊された「新旧時代」の後続誌で、数度の改称や吉野の死による途絶の後、一九三四年に再刊し、利根書房に移つてからは三二ページの雑誌へと拡大した。一九四四年初頭に終刊したと見られるが、利根書房もそのころに出版事業に終止符を打つたものと思われる。



「女生徒」
(砂子屋書房)



晩年
(砂子屋書房)

砂子屋書房／松本和也

著者から許諾が得られていないため非公開



『佳日』(肇書房)

肇書房／松本和也

著者から許諾が得られていないため非公開